

変わらないために、変わりつづける

上 廣 哲 治

この欄では最近、「改革」について述べることが多く、会友の皆さんのなかには、何か特別に新しいことに挑戦しなければならぬのかと、身構え悩んでいる方もおられるようです。また、改革によって、実践倫理の理念まで変わってしまうのではないかと、心配されている向きもあると聞きます。

そこで今回は、なぜ改革が必要なのかについて補足し、それこそが実践倫理を守り抜く唯一の道であることを説明しておこうと思います。禅問答風のタイトルをつけましたが、言わんとすることは大袈裟なことではなく、きわめて常識的なことです。肩の力を抜いて向き合っていたらいいと思います。

かつて、PHP研究所のフェイスブックに「松下幸之助 今日の言葉」という連載があり、パナソニックの創業者で「経営の神様」と呼ばれた松下さんのさまざまな名言が、日々投稿されていたことがあります。そこで目にした「現状維持」についての小文は、改革の大切さを端的に示すものとして、今でもよく覚えています。インターネットで検索してみると、その文章はまだ残されていました。

「〔現状維持は後退の始まり〕

人間、とすれば変わることにおそれを持ち、変えることに不安を持つ。しかし、すべてのものが刻々に動き、一瞬一瞬にその姿を変えつつあるこの世の中。『うまくいっているのだから十分だ』と考えて、現状に安んずることは、即、退歩につながる。今日より明日、明日よりあさつと、日に新たな改善を心がけたい」(二〇一五年八月二十六日掲載)

これを読んだ当時、すぐに私の頭に浮かんだのは、毎朝唱えている「朝の誓」が、どの条も「今日一日」という言葉で始まっていることでした。

「今日一日」は、松下さんが言う「日に新たな改善」をうながす言葉です。朝の訪れとともに、今日を善き一日にしようと決意し、その目標に向かって努力していく。たとえ成果が小さくても、その決意と努力の積み重ねこそが、さまざまな改革への第一歩であり、実践の要となるのです。

前会長はよく、改革の必要性を「自転車」にたとえておられました。「われわれの実践は、自転車に乗っているのと同じようなものだ。前へ向かってペダルを踏みつづければ転倒してしまう」と。私たちを取り巻く世界は刻々と変化しているし、ときにはきつい登り坂に出くわすこともあります。しかし、そこで進むことをやめてしまったら、それこそ急速な退歩が始まってしまいます。「自転車」を押してでも、どんなにゆっくりでも前へ進むことで、改革を堅持する必要があるのです。

もちろん、力強くペダルを踏みつづけることは、誰にでも簡単にできることではありません。実践をつづけていけば、スランプに陥ることもあるし、一息入れたくなることもあるでしょう。「今日一日」とは、そのような人たちに対して、「無理をしなくていい。今日一日だけでも頑張ってみよう」という励ましを与えてくれる言葉でもあります。一日に何キロ走るといったノルマがあるわけではなく、自分

の可能な範囲内で、やれることをやればいいのです。

ただ、ここで注意しておきたいのは、休み休みであれ前へ進もうとするのと、現状をよしとして歩みをやめてしまうのでは、決定的な違いがあるということです。過去の実績などにこだわりつけ、前進することを忘れてしまったとき、人は現状を維持することすらできなくなってしまう。

鴨長明の『方丈記』冒頭に「ゆく河のながれは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」とあるように、川の流れはよほどの増水や渇水でもないかぎり、いつも同じ姿を見せてくれます。しかし実際には、水は常に動いていて、今日にしている川面の水は少し前に見ていた水とは異なります。

生物学者の福岡伸一さんによれば、生命も同じだと言います。「生体を構成している分子は、すべて高速で分解され、食物として摂取した分子と置き換えられている。身体のあるゆる組織や細胞の中身はこうして常に作り変えられ、更新され続けているのである」(『動的平衡』)。つまり、昨日の自分と今日の自分は同じに見えても、それを維持するためには、環境に適応し、常に細胞を新しいものにつくりかえていかなければなりません。変わらないでいるためには、変わりつづける必要があるのです。

それは、人の営みについても言えることです。たとえば、伝統工芸を引き継ぐ職人のことを想像してみてください。職人は先代と同じものをつくることで、仕事を覚えます。けれど、ただ先代のコピーをつくるわけではなく、そこに時代に応じた工夫をこめようとしています。そうした工夫がなければ、伝統はいつか滅びてしまうからです。状況に応じた改革があつてはじめて、伝統は活かされていくのです。

引き継いだことを守るために「変わりつづける」例を一つ紹介しておきましょう。東京の浅草に食パンとロールパンだけを製造販売しているパン屋さんがあります。創業は一九四二(昭和十七)年ですから、八十年近くつづく老舗です。

この店では、常連のお客さんから「昔より味が落ちた」と言われないよう、品質の維持に努める一方、時代によって変化する日本人の生活環境や嗜好、季節の移り変わりにまで配慮して、材料の配合を調整してきたといいます。四代目にあたる現社長が、自らの仕事について語っていることにも、伝統工芸の職人たちの姿勢に通じるものがあります。

「私が常々思っているのは、『変わらないために、こちらが変わっていく必要がある』ということなんです。(中略) 変わらないものを提供し続けるためには、自分を意識的に変えていかないといけないと思うんです。パン作りにおいても、こちらが季節や天候によって毎日微調整をして、ようやく『変わらないもの』ができることと、同じ考え方です」(『パンの人 仕事と人生』)

実践倫理宏正会は、このパン屋さんよりわずかに、若いとはいえず、今年七十五周年を迎えた「老舗」です。私たちは当然のことながら、常に創立の原点に立ち戻り、「我も人ももの仕合わせ」をはじめとする基本理念を守っていかねばなりません。しかし、引き継いだものを守り、次世代に伝えていくためには、単なる懐古や復古ではなく、時代の流れに応じた改革を進めていく必要があるのです。

たとえば、「家庭愛和」や「夫婦愛和」という理念は不変でも、家庭や夫婦を取り巻く環境は数十年の間に大きく変わっています。その変化から目を逸らし、昔の感覚で「男性が働きに出るべき」とか「女性が家庭を守るべき」といった姿勢を押し通すことは、会の伝統を守ることにはならないでしょう。一本の太い筋を貫き通すために、常に改革を継続すること。それこそが、七十五年の伝統を守り、未来につなげていく原動力になります。私たちは、変わらないために、変わりつづける必要があります。